

白崎禮三と瀬川健一郎

『織田文庫』蔵、作之助宛書簡をめくって

高松 敏男（元中之島図書館）

「虚無の相貌を点検し了り、^{チン}瀝青色の穹窿を穿って、エデンの樂園を覗かんとする卑劣を放棄した時、詩人は、最初の毒を飲まねばならない」。 「今は降り行くべき時だ」と。

これは大正 15 年 11 月、同人誌「山繭」が富永太郎の 1 周忌を記念してだした追悼号に、小林秀雄が送った一節である。そして小林は、富永の裸像をいっそうしっかりと見据える。

「彼は、その短い生涯を、透明な衰弱の形式に定着しつゝ、二十五で死んでしまった」

「私は、花の様な衰弱を受けた」と、たった一行の凝縮した言葉に刻みつけて……。

その富永には、小林秀雄、中原中也、河上徹太郎、そして年下に大岡昇平ら恵まれた友人がいた。富永の存在はこれら友人に語りつがれることにより、我が国唯一の象徴詩人として、時と共に輝やきを増した。

この東の詩人に対して、その人生の出発点において、「最初の毒」を飲んだ詩人として、もう一人西に白崎禮三がいる。彼も決して友人に恵まれなかったわけではない。昭和 6 年 4 月に第三高等学校甲類に入学するや、同級の織田作之助、瀬川健一郎、1 年上級の青山光二らと因縁めいた強い絆で結ばれていく。そしてつきあいのよい白崎は、仲間とことごとく行動を共にし、あっという間に「フランス象徴詩派の流れに没入する」、「不羈無頼の文学青年に変貌」(1)。あげく出席日数不足と落第を繰り返し、果ては退学し、その後はひとまず東京暮しもするが、やがて病のために郷里の敦賀に帰省。所謂、シャートオブリアンの「未だ生活せざる以前にすでに悩める疲労と倦怠」を持つ男として、1 冊の詩集の出版を夢見るが、「海風」第 6 号に『詩集闇の波』の予告が出ただけで、念願は果たせず終る。「咽喉の痛みで神経が疲れ、(中略)眠ってばかりある」、「煙草がすへるやうになったら会をう」という言葉を、織田作之助宛に残して 30 才で世を去る。

そんな白崎禮三の存在をぼくが知ったのは、昭和 30 年 9 月に青山光二の『青春の賭け』（現代社）の出版を見た時からであったが、その後、特に注目することになるのは、織田作之助の実姉竹中タツ氏が大阪府立中之島図書館に寄贈された織田の旧蔵書の中に、白崎の織田宛書簡が 14 通も保管されていたことによる。おりしも無頼文学研究会に所属し、『無頼文学辞典』の項目中、「白崎禮三」、「瀬川健一郎」、「富士正晴」などの執筆依頼を受けていたことゝも重なり、昭和 52 年 8 月に「織田文庫」が一般公開された機会に白崎の書簡

全部に目を通す。するとその中の 1 通に、瀬川健一郎氏との友情を確認しえる次のような一文が綴られているのに出会う。

「瀬川応召のこと無論通知はなかった。それはいゝが、どうも予想外のことでは何か寂しい。無事に帰ってくれゝばいゝが、見境なしにしぼられてゐるだろうと思ふと妙に悲しい。」(昭 17.12.22 付、織田宛)

これは瀬川氏も知るはずもない手紙の文面であるから、発見した者がすぐに伝える必要があった。が、そう思いながらも、結局念願を果たしたのは、数年後の昭和 55 年 3 月、中之島図書館発行の“図書館だより”「なにわつ」に、『白崎禮三詩集』の紹介文を掲載した直後になってしまう。

白崎の書簡のコピーと、『なにわつ』の 2 点を同封し送付したところ、折り返し次のような返信が高松宛にとどく(2)。

拝啓

いい気候になってきて気持も明るくなりますが、ご多忙のこと存じます。お忙しいなかを図書館だより誌 ご恵送下さいましてありがとうございます。お礼申し上げます。

白崎禮三詩集はまことにありがたいもので、富士君に感謝しています。織田の友人たちが作らなければならないのに、富士君に作ってもらって恥ずかしいことです。このことは富士君にも申し上げておきました。白崎の詩の一つ一つに思い出があって、当時を思い出しますが、ぼくは白崎の詩に傾倒していました。いい友人でしたし、応召のとき手紙を出さず通知をしなかったとすれば、白崎にまことにすまないと思います。どうして通知をしなかったのか、自分でもよくわかりません。白崎をかなしませたことを詫びたい気持ちです。 白崎のこと、織田のこと(三高時代)は早く書きたいのですが、なかなか書けません。その原型は織田の本の解説で三十枚ほど書きましたが、五百枚位書きたいと思っています。昭和六年から十一年までです。

お礼申し上げるのがおそくなりました。しばらく歯医者(大阪)に通ってしまして、やっと終わったところです。

ご自愛を祈り上げます。ありがとうございました。

敬具

瀬川 拝

書簡で綴られている「応召云々」は、この時より40年近くも昔にさかのぼる話である。その間、昭和48年1月20日には、白崎の願もかない、手紙に綴られているように富士正晴が私版で『白崎禮三詩集』（青山光二、富士正晴編　タイプ版　非売品）も刊行されている。（「嶽水会雑誌」発表の詩から4篇、「椎の木」から24篇、「海風」から26篇、外に青山光二「略年譜」付）。巻頭に「故白崎禮三の詩稿の散逸をおそれて」、「とりあえず小部数作り贈る」という文句をそえて。

それにしても、『織田文庫』に残された14通の書簡を読んで、深く心を揺り動かされるのは、綴られた白崎の肉声であり、生ざまである。最初の昭和16年（月日不詳）の東京淀橋区大久保百人町二・六　渡辺方から、野田村丈六の織田宛書簡（「読物と講談」の用箋を使用）では、「海風は頑固な雑誌にしたい」と決意のほどを綴り、さらに同17年9月16日の書簡でも、「大阪文学九月号見た。表紙が非常にいい、これでは中味が表紙負けする。」「小説やっと十枚書いた。序が終わったしいよいよ本題五十枚位にはなるだろう」と意気込んでいる。が、病状が徐々に悪化し、郷里の敦賀に戻った頃から、文面も次第に変わっていく。

「今咽喉をいためてあるのでこれが癒ってからにする。結核ではないと思ふが咽喉の粘膜がただれてゐる　煙草がすへず何もかも手持無沙汰だ」（織田宛、昭18.9.8）

「会って話出来るまでになつてゐないのだ。粘膜がただれてゐるので一食一食がかなりの苦痛なのだ。（中略）實際厄介な病気になつたものでこの苦痛は人にはちょっと想もつかないらしい」（同18.11.22）

そして昭和19年（29才）末には、友人とも恩師とも会うことを拒否し、寝たままとなる。翌年1月20日、繰り返すが30才、若すぎる死であった。

青山光二は「略年譜」の昭和6年（17才）の部分で「禮三をして詩人の宿命を自覚せしめる契機となつたものに」、「武生市での、遠縁にあたる年上の、有夫の女性との恋愛・失恋事件があるが、詳細はすでに知る由もない」と特に書き加えていることに、富永太郎の人生を重ねて戦慄を覚える。

(1)青山光二「白崎禮三略年譜」より引用。

(2)消印、判読不詳。昭和55年4月と記憶する。